

NCR87における若干の考察

石井保廣

1. はじめに

資料組織演習の標準ツールとしては、いわゆる「三種の神器」である、NCR、NDC、BSHと日本著者記号表が使われることが一般的であろう。

筆者も2007年度に向けて、これらを標準ツールとして使った、資料組織演習の教科書を刊行しようと思いついた。中でも、記述目録に関しては、NCRを紐解きながら筆を進めたが、あらためて書いてみると、不明な点、疑問な点や筆者の不勉強からくる理解が困難だった点などが浮かび上がった。

○階層関係ある書誌の記述

多段階記述様式・簡易多段階記述様式、分割記入様式（物理単位）の記載方法

○並列タイトルの扱い

第2水準における記載箇所

(参)国立国会図書館、多くの図書・教科書

○タイトル関連事項と標目

タイトル関連事項は標目と成り得ないか（付録5カード記入例と22.1.0.2ウ）

(参)国立国会図書館「日本目録規則 1987年版 改訂版」第2部 標目 適用細則

○入手条件と区切り記号

本則での要素（標準番号）がない場合、次に続く任意規定（入手条件等）の前の区切り記号は必要か？

○注記事項に関する定型・不定型とは

定型・不定型をどこで決めるのか？定型のテンプレートとなる雛形はあるのか

今回は、この中から階層関係のある書誌についてNCRを忠実に解釈して、実際のカード目録を私見も交えながら作成してみる。

2. NCRにおける集合書誌単位の多段階記述様式・簡易多段階記述様式の扱い方

書誌階層を持つ資料の記載法については、序説7)、総則0.8、本文各章の△.0.2.△、「記述付則2 記述の記載例」、「付録6 用語解説」で採り上げられているが、多段階記述様式、簡略多段階記述様式、さらには分割記入方式との違いやセットもの全体を記述対象（一括記入方式）とするか形態的に独立した部分ごとを記述対象（分割記入方式）の方法について理解が難しいように思える。

①序説7)

書誌階層の意義などが述べられており具体的な記述法はない。

②総則0.8

階層構造が上位、基礎、下位の単位で解説されており具体的な記述法はない。

③本文各章△.0.2.△

具体的には、1.0.2.△（記述総則）、2.0.2.△（図書）、6.0.2.△（録音資料）、9.0.2.△（電子資料）、13.0.2.△（継続資料）で規定されている。これらの章では、ほぼ次のようなことが説明されている。

- ・原則として単行レベルを記述の対象とする
- ・個々の資料のほかに、単行資料の集合（セットもの、シリーズ等）も記述の対象とする
- ・必要に応じて集合レベルや構成レベルから記録することも可とする
- ・それぞれのレベルで記述する場合の記録順序
- ・別法として、必要であれば、物理単位の記録も可とする

これらのことから、

- ・単行レベル・集合レベル・構成レベル、物理レベルのどのレベルからでも記述可能
- ・それぞれの書誌単位での記載順序を規定している

④用語解説

用語解説には、関係する項目として多段階記述様式、簡略多段階記述様式と分割記入方式が説明されている。

- ・多段階記述様式：2以上の書誌レベルにわたる書誌的事項を、レベルごとに分離し、上位書誌単位から順次記述する記載様式
- ・簡略多段階記述様式：多段階記述様式の書誌的事項の一部を省き、簡略化した形で記述する記載様式
- ・分割記入方式：記述の対象となる単行資料やセットものを、形態的に独立した部分ごとに記述する記載様式

以上のことから、

- ・多段階記述様式、簡略多段階記述様式の違いは書誌的事項の詳細さ
- ・分割記入方式＝形態的に独立した部分ごと（物理単位）での記載様式

であることがわかるが、各章で規定された単行資料の集合を記述する一括記入方式についての説明はない。そもそもNCRのなかに一括記入方式なる用語は存在せず、日本目録規則 新版 予備版で使われていた用語である。

⑤記述付則2 記述の記載例

ここでは、「多段階記述様式」及び「簡易多段階記述様式」を実例で示している。

- ・多段階記述様式：2階層の書誌の例を挙げており、セット物全巻を記録する一括記入方式を紹介している。
- ・簡略多段階記述様式：同様に、2階層の書誌の例を挙げているが、単行書誌は特定の巻のみが記録されている記載方法を例示している。

3. どのように解釈するか

多段階記述様式と簡略多段階記述様式の違いは出版・頒布に関する事項、形態に関する事項の記載位置の違いしか見出せない。

用語解説には、精粗の度合いの違いとしているが、むしろこれらの記載例を見る限り、セット物全巻を記録（一括記入）するか、単行単位のための記録かの違いのようにもみえる。

このため、種々の文献やネット情報をあつたが、明解な答えを得るに至らなかった。

唯一、日本図書館協会目録委員で予備版の作成時点から参画された植田氏の著作（参考文献参照）で、1冊を対象とした「多段階記述様式」が例示されており、特に多段階記述様式で一括記入が必須ではなさそうである。拡大解釈して、逆に簡略多段階記述様式で一括記入が許されるとすると、NCRの記載例を見る限り単行単位ごとの書誌の事項は、むしろ簡略多段階記述様式が多くなるように思える。

解釈としては、あくまでも原則外（単行単位を原則とする）と理解し、一括記入、単行単位、分割記入については、後述する「書誌階層の適用」をふまえ、それぞれの図書館で、柔軟に対応できるのではないかと考える。

4. 各書誌階層の構造

以下、NCRに規定から各階層ごとの記録の構造と記入例を示してみた。

記録様式等	
・ 基礎書誌単位	単行書誌単位、継続刊行書誌単位
・ 集合書誌単位	多段階記述様式、簡略多段階記述様式 ④多階層あり、上位から順次記載
・ 構成書誌単位	分出記録様式（構成書誌の数だけ作成）
.....	
・ 物理単位	分割記入様式（単行書誌、集合書誌あり）

①基礎書誌単位

		単行書誌単位or継続刊行単位
		集合書誌単位
		構成書誌単位
		○

②集合書誌単位

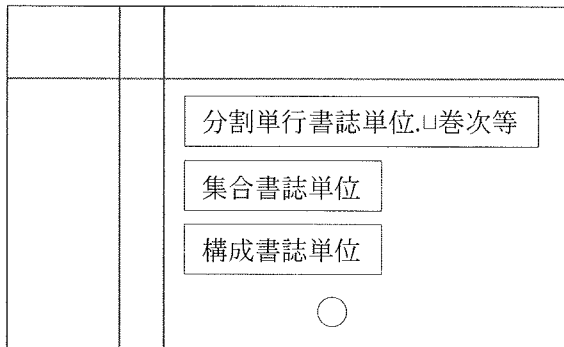
		集合書誌単位
		単行書誌単位
		構成書誌単位
		○

③構成書誌単位

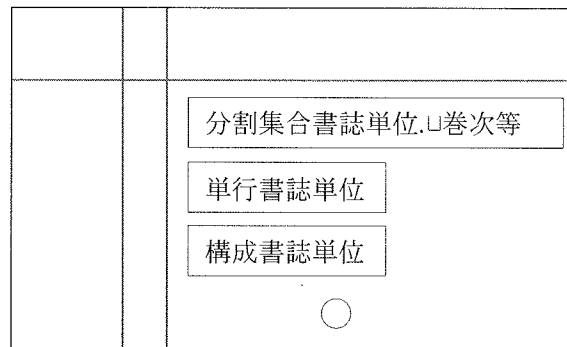
		当該構成書誌単位
		単行書誌単位or継続刊行単位
		集合書誌単位
		○

④集合書誌単位

単行単位の分割

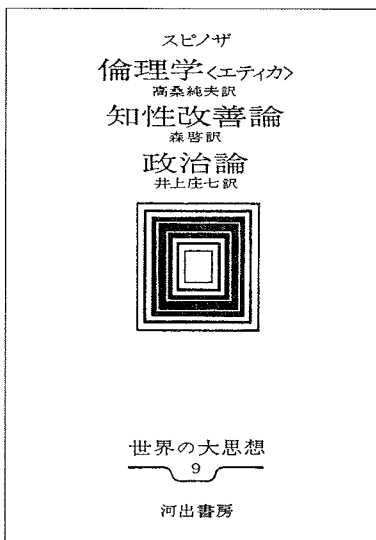


集合単位の分割

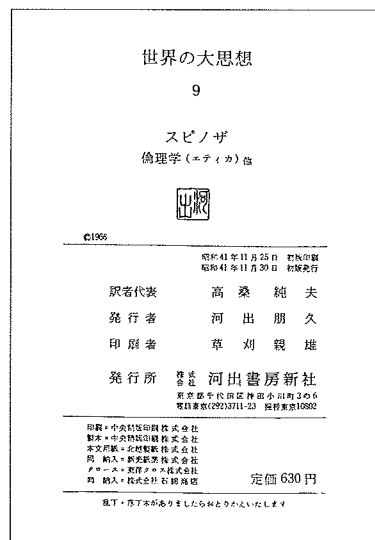


5. 具体的資料をもとにした記入例

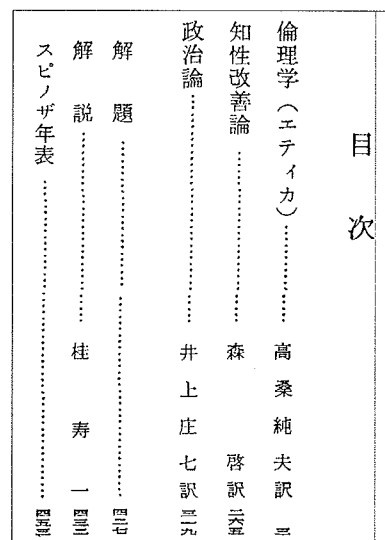
標題紙



奥付

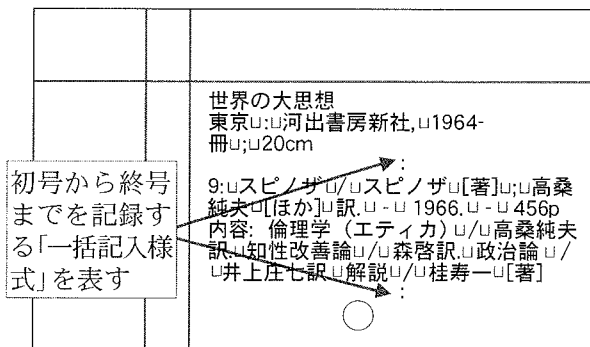


目次

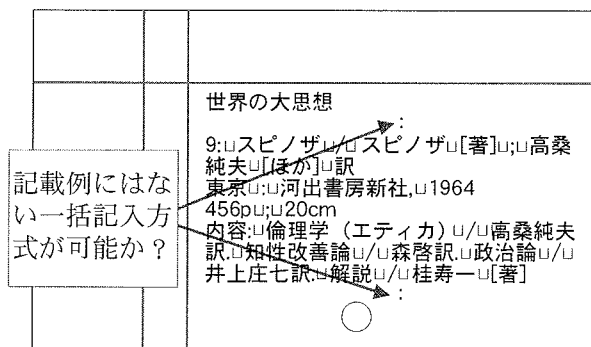


1964 -、19.7cm、456p、年表453-456p

集合書誌単位（多段階記述様式）



集合書誌単位（簡易多段階記述様式）



単行書誌単位		構成書誌単位 1	
	スピノザ ^U /スピンザ ^U [著] ^U ;高桑純夫 ^U [ほか] ^U 訳 東京 ^U ;河出書房新社 ^U 1966 456p ^U ;20cm ^{U-U} (世界の大思想 ^U ;9) 内容:倫理学(エティカ) ^U /高桑純夫訳 ^U 知性改善論 ^U /森啓訳. 政治論 ^U /井上庄七訳 ^U 解説 /桂寿一 ^U [著] スピノザ年表 ^U p453-456		倫理学(エティカ) ^U /スピンザ ^U [著] ^U ;高桑純夫訳 ^{U-U} (スピノザ ^{U-U} 東京 ^U ;河出書房新社 ^U 1966 ^{U-U} 3-264p ^{U-U} (世界の大思想 ^U ;9))
内容細目	○		このほか、知性改善論と政治論の記述ができる ○
	内容に関する注記		

6. 書誌階層の適用

各図書館の事情により、それぞれの階層で採る必要がある場合の判断基準例を挙げるが、いずれにしても、一貫した方針で臨む必要がある。

①基本は、単行レベルでの記述である。→ 1.0.2.1

②その資料は、セットものあるいはシリーズものとして、継続的に受け入れていく方針か。

- ・継続的受入 → 集合書誌単位
- ・単発 → 基礎書誌単位

③集合書誌として、書架上の1か所集中か、それとも単行資料として主題ごとに分散排架する方針としているか。

- ・1か所集中排列 → 集合書誌単位
- ・主題ごと → 基礎書誌単位

④目録記入のデータは蔵書点検や貸出データとしても使うのか。

- ・使う → 物理単位

NCR87では、必要に応じて標目とするタイトルに内容細目のタイトルをあげており、→ 22.1.0.2
 一つの図書の中にある各作品は、内容細目から標目を分出記録することができるため、事実上構成書誌単位の記述による目録編成を採用することはまれであろう。

(いしい・やすひろ 別府大学教授)

参考文献

- ・ IFLA 『ISBD (M)』, 2002rev. http://www.ifla.org/VII/s13/pubs/isbd_m0602.pdf
- ・ 石井保廣 『図説 資料組織の実際』 佐伯印刷, 2007. 120p. (刊行予定)
- ・ 植田喜久治 『目録作成の技法 改訂版』 日本図書館協会, 1992. 288p.
- ・ 日本図書館協会目録委員会 『日本目録規則 1987年版改訂3版』 日本図書館協会, 2006.
- ・ 日本図書館協会目録委員会 『日本目録規則 新版 予備版』 日本図書館協会, 1977.